

幅広い分析技術のシーズから、 顧客ニーズに応えて新たな価値を創出

科学技術の発展や産業の基盤を支える技術として、分析・計測技術が重要性を増している中で、株式会社日立ハイテクノロジーズは、2013年10月1日付けでグループ内の分析機器事業を株式会社日立ハイテクサイエンスに統合する。その背景とねらいを聞いた。

日立ハイテクグループは、2013年10月1日付けでグループ内の分析機器事業を日立ハイテクサイエンスに統合します。日立ハイテクサイエンスは、セイコーインスツル株式会社より日立ハイテクノロジーズが全株式を取得したエスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社を前身とします。同社が長年にわたって築き上げてきたX線、熱分析、イオン光学、物理計測、原子間力顕微鏡などの技術と、日立ハイテクグループ内で培ってきた多様で競争力の高い分析技術を集約することで、複雑化、多様化する分析ニーズにタイムリーに応えていくことをめざしています。

スマートフォンをはじめとする小型情報端末や、リチウムイオン電池など、現代社会を支えるデバイスの製造では、これまで以上に微細なレベルでの高い精度が要求されています。一方で、経済のグローバル化が進む中、海外製造拠点における品質の確保や歩留り向上も課題となっています。分析機器は従来からの研究・開発段階での利用だけでなく、製造現場における日常的な品質管理への適用など、産業界における分析機器へのニーズや必要とされる技術も大きく変化しています。

日立ハイテクグループの分析・計測技術は、光学技術と電子ビーム技術を二つの大きな柱として発展してきました。分光技術を用いて血液などの成分を迅速に分析する生化学自動分析装置、電子顕微鏡技術を応用した半導体デバイス検査装置、光学技術と流体制御技術を活用したDNAシーケンサーなど、高度な技術シーズを時代とともに変化する社会ニーズと結びつけた装置で、グローバル市場でも高いシェアを獲得してきました。

また最近では、蛍光X線技術、ラマン分光技術、質量分析技術など、古くからある分析技術が、新しいニーズと結びついて再び価値を生み出す例も増えてきました。最先端技術を追うことはもちろん重要ですが、一つ一つは小さくても多様なシーズを幅広く持つておくことも必要です。これらの異なる技術を融合し、連携・進化させることでお客様が「見えなかったもの」、「計れなかったもの」、「解析できなかったもの」の分析・計測を可能にし、新たなソリューションを提供することも可能となります。こうしたことから、今回、日立ハイテクグループ内の分析機器事業を集約したのです。

今後はグループ内外でのオープンイノベーションにも力を入れ、技術シナジーを最大限に発揮することをめざします。日立ハイテクグループの分析装置・電子顕微鏡を揃え、お客様へのデモンストレーションや実習に対応したラボも活用しながら、お客様の真のニーズを捉えることにも力を入れていきます。

分析装置はさまざまな分野の研究開発を支え、科学技術の発展にも欠かせないものです。日立ハイテクグループは、基盤となる分析技術そのものの裾野の拡大と進展、お客様のニーズに応える課題解決型の装置の提供を両輪として推し進め、科学技術と産業の発展の一助となることで、広く社会に貢献していきたいと考えています。



池田 俊幸

株式会社日立ハイテクノロジーズ
執行役
株式会社日立ハイテクサイエンス
代表取締役社長

1980年日立製作所入社、同社那珂工場において自動分析装置、検体搬送自動化システムの開発などを経て、2011年4月日立ハイテクノロジーズ執行役、2013年4月日立ハイテクサイエンス代表取締役社長。

日本医療機器産業連合会理事、一般社団法人日本臨床検査標準協議会常任理事、医療機器業公正取引協議会理事。